

## <報告>

国際学部の学生にとって、「アジア研修」とは何であったのか  
—幾つかのキーワード、そして「旅」にかんする中間的総括—

奥田孝晴

# The Asian Study Program : What Is It for the Students of the Faculty of International Studies?

Takaharu OKUDA

## Abstract

This report is to summarize some significances of the Study Abroad Program to Bangladesh and Thailand for the students of the faculty of International Studies of Bunkyo University. The program which is so-called the Asian Study Program was organized by the all-faculties' International Exchange Committee for 6 times in past. Through the program, the participants of the faculty could have the opportunities of many intellectual enlightenments as well as those of their humane growth. In this report, I would like to describe the outline of the program by means of "sticking" to the several key-notions of the program and convey all readers the students' wonderful experiences in two countries of the Third World.

## はじめに

文教大学国際交流委員会主催のバングラデシュ・タイ研修（以下、「アジア研修」と呼ぶ）は大学における唯一の全学海外研修プログラムとして、過去6回実施されてきた。筆者は第3回（1996年実施）に引率者として初めてかかわり、以来、実施に協力・参画してきた。米国における同時多発テロ事件以降の国際的政情不安のあおりを受けて、残念ながら昨年度の第7回目は中止のやむなきに至ったものの、発展途上諸国を対象としたユニークかつ深い内容を備えた海外研修プログラムとして、アジア研修は毎年多くの本学学生の興味関心を引き付ける、魅力ある企画として今日に至っている。

参加学生の健康管理を第一義として、この研修は現地の気候条件が比較的良好な12月上～中旬に行なわれる。現地では、発展途上諸国特有の社会経済開発の実態に触れるためにNGO関係機関の見学、識者とのミーティング、教育・福祉施設などへの訪問のかたわら、アジア世界の多様性を理解するべく、仏教遺跡、ヒンドゥー寺院、モスクなどの宗教施設を訪ねたり、船・鉄道・リキシャなどに試乗したり、さらには日本とアジアの過去と現在の関係を探る為、かつての戦場に立って「戦争と平和」の問題を考え、また時には現職大臣や外交官経験者とそれぞれの国の内政問題や地域の外交問題を語り合うなど、多彩な視点からの多様な内容の研修が展開されてきた。したがって参加学生にとって、

研修期間中の約2週間は毎日が大変である。昼間は訪問・見学・ミーティング、夜は熟睡というのが通例のパターンだが、実は私がたまたま夜間に主宰する社会開発経済に関する「公開自主講座」への参加率も結構高かった。「健全かつ真面目過ぎる？生活」というのが、これまで4回のアジア研修に参加しての偽らざる感想である。

また現地での滞在を確実に安全なものとし、研修成果を最大限にあらしめるため、参加学生には2～3回の事前研修と、予め割り振られた調査テーマに基づく事前研修レポートが、また研修後には総括レポートが課される。特に事後研修レポートは、本研修終了直後の熱気と感動を触媒として生み出された知的成果だけに、内容的にも相応の“迫力”があり、優れたものが少なくない。(ちなみに、私はこれを刷り増ししていただき、国際学部教授会を通じて先生方の評価を仰ぐことを慣例としている。)参加学生は事前研修→本研修→事後レポートと続く活動を、かなりのエネルギーとスピードで消化していかなければならず、精神的にも体力的にも、この研修は文教大学で実施されている数々の海外研修中でも「結構ハード」なものと言えよう。(蛇足ながら、この「ハードさ」は、もちろん引率者にとってもしかり、なのだが…)

アジア研修の概要、スケジュール等の構築プロセス、具体的指導項目、コンテンツの詳細等については、同研修を企画構想し、初回から意欲的に指導・実践されてきた藤田雅子・人間科学部前教授(現・常磐大学コミュニティ振興学部教授)が既に幾つかの懇切丁寧な報告書を発表しているので、本報告においては重複の愚を避けたいと思う。<sup>(注1)</sup>ただ下記〈表〉からも分かるように、国際学部からはこの数年アジア研修に参加する学生が増えており、第5回以降は2ケタの学生が参加するようになった。過去6回の参加者総数の上でも、延べ135名のうち56名が国際学部の学生によって占められており、アジア研修の“最大勢力”を構成するに至っている。少なくとも量的側面においては、国際学部こそがアジア研修の最大の「受益者」であることは、厳然たる事実であろう。

本稿はそれとは別に、特に実質的(内容的)側面に焦点をあて、過去6回のアジア研修の意義を、専ら国際学部の学生たちとの関わりにおいて総括することを目的としている。後述するように、この研修の「旅」は単に参加学生だけでなく、その後の彼らの諸活動を通じて学部全体にも諸々の教育的効果を及ぼしているように見える。したがってここで問題としたいのは、この研修が参加学生に与えてきた知的・情念的なインパクトだけでなく、彼らが媒介となって生み出してきた国際学部の教育活

〈表〉 アジア研修における国際学部学生の参加者データ(1994～2001年)

年 度	国 際 学 部							情報学部	短 大	越谷キャンパス	総 計
	1年	2年	3年	4年	男	女	計				
第1回('94)	1	4	3	2	2	8	10	4	0	9	23
第2回('95)	0	3	0	3	1	5	6	1	0	18	25
第3回('96)	5	0	0	0	0	5	5	1	0	16	22
第4回('97)	5	0	2	1	0	8	8	0	1	12	21
第5回('98)	※ 中 止										
第5回('99)	0	0	14	0	3	11	14	0	0	3	17
第6回('00)	3	5	5	0	4	9	13	2	0	12	27
第7回('01)	※ 中 止										
延べ人数	14	12	24	6	10	46	56	8	1	70	135

※第5回('98)はバングラデシュの洪水により、また第7回('01)は同時多発テロ事件以後の現地情勢を考慮して中止のやむなきに至った。

動総体に対する波及のダイナミクスをも含んでいる。

「希望というものは、あるとも言えるし無いとも言える。歩く人が多くなる時、そこに道はできる。」—近代中国白話文学の巨人、魯迅は彼の代表的小説『故郷』をこんな言葉で締め括っている。少し大げさな言い方だが、本報告執筆に際しては、この一節が頭を離れることはなかった。アジア研修に参加する国際学部の学生が次第に増えていくなかで、この「旅」が一体どのような「希望」を彼らに与え、また学部の教育実践にいかなる「道」を切り拓くこととなるのだろうか。今はまだその途上にあるとはいえ、この研修に多少なりとも関わってきた国際学部の一教員として、しばし後ろを振り返ってみることにしたい。

執筆に際しては、アジア研修を企画実践していくうえで欠くことの出来ない主題を幾つかのキーワードに集約し、各節題とすることとした。それらの意味にこだわることを通じて、現地での活動の意義を考える。内容的に多様で、知的に興味深く、また参加者それぞれの生き方に深いレベルで影響を与えているこの研修の理解に役立つならば、筆者としては幸いである。

## 1. The Third World (第三世界) — 「異世界」への扉

ダッカの朝は遠くから聞こえてくるアザーン（イスラームの祈り）のエキゾチックな音律から始まる。霞がかった窓の外に望むモスクのミナレット（尖塔）を、眠気交じりの眼で見やりながら、私たちは自分たちが今、異なる文化、異なる歴史、異なる風土を持った土地にいることをあらためて認識するのである。

「異世界への扉」は、すでにその前日、ダッカ空港から一步を踏み出す瞬間に押し開かれる。空港ロビーの出口にたむろする大勢の人、人、人…荷物運び、ポン引き、物乞い…めくるめくような混乱、大小無数の罵りあい（会話？多分…）、リキシャのクラクション…喧噪と雑踏と騒擾…凄まじくも圧倒的なバイタリティーとエネルギーがもたらす衝撃の前に、バングラデシュの地を初めて踏む我が学生諸君は例外なくたじろぎ、戸惑いを見せている。「負けるな、さあ、勇気を持って一步を踏み出そう」—約四半世紀も前、深夜のバンコク・ドンムアン空港に降り立った一人の貧乏学生（ちなみに、私のこと）が、自分自身を鼓舞しようと心に叫んだ、その同じセリフを彼らにぶつける。（ちなみに、その当時のタイの一人当たりの年間所得はおおよそ250USドル、現在のバングラデシュのそれとほぼ同程度であった。）ここが日本とも欧米とも違う別世界であることを否応なく認識し、わずかに1週間とはいえ、この「異世界」に暮らしてしていかなければいけない、というある種の「決意」を迫られる濃縮された一瞬——カルチャー・ショックと一言で済ましてしまえば身もフタもないのだが、こうした瞬間の存在こそは、アジア研修全体の中でも最も重要で、意味のあるものである。学生たちは「異世界」の真っ只中に放りこまれ、その圧倒的な現実の前に立ち尽くすことで、これまで自分が住んできた世界が、実は「全体」のほんのわずかなものでしかなかったことを痛感し、かつこれまでの自身のありようへの再検討を余儀なくされるのである。…そう、私たちは2日をかけ、時計を4時間引き戻すことで、「こちら側の世界」へとやってきた。

The Third World—実は最近では授業でもあまり使わなくなりつつある言葉なのだが、Developing Countries というよりも、この言葉に備わるエネルギーな響きが自分は好きだ。かの貧乏学生が国際関係論と国際経済学を少しばかり噛り始めた1970年代の中頃、「第三世界」は世界の現状打破と変革をもたらすエネルギーの代名詞だった。ベトナム戦争が惹起した反戦平和運動の世界的な高揚、石油ショックに象徴される資源ナショナリズムの台頭、新国際経済秩序樹立への要求等々…第三世界各

地における様々な民族解放運動こそは、バクス＝ルッソ・アメリカーナの既成国際秩序を根底から揺さぶる変革の発信源であるかに見えた。この時代、我国では国際経済における貧困と低開発の問題がようやく世間でも注目され、いわゆる「南北問題」の重要性に焦点があてられるようになった。環境、人口、食料などのグローバル・イシューズが国際舞台において本格的に議論されるようになったのも、第三世界民衆のたたかいは抜きにしては考え難い。不幸なことに、第三世界ナショナリズムの高揚は、続く80年代には世界的不況とレーガノミックスに代表される先進諸国の「内向き政策」の前に光彩を失い、「失われた10年」の中で新国際経済秩序実現への希望は、いったんは遠くへ去って行ったかに見えた。しかし今、多くの「南」の人々は試行錯誤を繰り返しつつも、今度はより現実的に、よりしたたかに、そしてより必死になって現状からの脱出を試みている。第三世界は再び世界史の原動力として、多様な形態をとって国際社会の表舞台に立ち現れつつある。

本題から少々逸れてしまったかもしれない。井戸の水を飲む人は、その井戸を掘った人の苦勞を忘れるべきではないだろう。アジア研修の実現に努力された藤田前教授が、このプログラムを立上げる際の苦勞話をしばしば語ってくれたことを思い出す。同氏は、周りからいろいろな事を言われたという。学生の安全を心配する立場からの良心的アドバイスもあれば、中には現地への無知・無理解としか言いようのない低レベルな中傷もあったという。その中でも極めつけだったのは、大学事務当局のさる元お偉いさんの発言だったそうだ。白く、「そんな所へ学生を連れていくなんで、どうかしてるんじゃないか。」…「彼の言う『そんな所』とは、いったいどんな所なのかしら！」と、バングラデシュを愛し、そこに住む人々に心からの共感を抱いている彼女は大いに憤っていた。「国際交流」といえば欧米世界との接触にしか頭が回らない想像力の貧困さ、あるいは創造性の乏しさを、私たちは自戒すべきなのかもしれない。

しかし、ものは考えようである。世界は広く、かつ多様だ。私たちの目の前には、飢え、貧困、低開発に喘ぎつつも、なおたくましく生きようとする数十億の個性が日々の暮らしを営む時空間が広がっている。その「お寒い人」が期せずして言ったように、地球上の8割の人々を包含する第三世界という名の「そんな所」は確かに存在し、ダイナミックに変革への時を刻んでいる。この「異世界」の実態に接し、またそこで生きる人々と直に向き合うことによってしか、私たちにとっては真の意味での「国際交流」も「海外研修」もありえない。そう、言いたいことは至極当たり前のことだ。私たちが「国際人」を志向し、世界の人々と呼び交わそうとする時、私たちはこの「異世界」との関わりから絶対に逃れることはできない、という紛れもない事実の存在を受け入れることこそが重要だ。

感性をより豊かに磨き上げ、知的により遅しくなり、よりしなやかな想像力を持つべきであろう。私たちが住む「宇宙船地球号」は、少数のスイートルームを備える一方で、多くの2等・3等席を持つ不平等な乗物である。しかも、「先進国」と呼ばれる国に住む私たちの暮らしと、第三世界の人々のそれとは何がしかの関係性を持ってつながり、日常は相互に影響を与えつつ過ぎていく。アジア研修で訪ねるバングラデシュとタイは、かたや南アジアLDC (Least Developed Countries) の典型国として、一方は1980年代後半からの「ASEANの奇跡」を現出した東南アジアの中進国として、それぞれの経済的發展段階に対応した特徴と固有の問題を抱えている。バングラデシュにあっては貧困と低開発からの脱却が当面の課題であり、タイにあっては1997年の通貨金融危機以降ますます顕著となった経済格差拡大と農村荒廃にいかん歯止めをかけるかが懸案となっている。かくの如く、第三世界の実態もまた多様そのものである。日本を含む3者の比較考察を通じて、国際学部の参加学生たちは「宇宙船地球号」の複雑な船内構造を探查し、相互の関係性を知覚する感性をより豊かに、知的想像力をより遅しく出来るであろう。世界の理解という点において、少しばかりは成長していく、という

わけである。

ダックは夜遅くまで騒音が支配する世界である。リキシャのクラクション、オート三輪の爆音、交通整理警官の警笛…埃っぽい空気に響く、耳を塞ぎたくなるような喧噪も、数日間この都市を離れ、水気をたたえた静寂が支配する農村へ行くと、今度は何故か妙に懐かしくなるから不思議なものである。かつて植民地支配の現地中枢だったこの国の首都と、搾取の主たる対象だった農村との間に横たわる理不尽な相剋関係については、ここに十分な説明ができるほどの紙面上の余裕がない。ただ、状況は今もあまり変わっていない。農村部の貧困と首都への過度の人口集中は、けっして別次元の現象ではない。南アジア特有の大土地制度のもとで、土地無し農民の所得はほとんど生存賃金ギリギリに留め置かれ、他に収入源を求める以外に道は残されていない。一方、都市部の工業セクターは残念ながら、農村から析出する貧困人口を吸収できるほどには、充分には成長を遂げていない。「希望」は完全に失われているわけではないのだが、バングラデシュにはまだまだ金、時間、そしてアイデアが必要だ。一方、タイの状況はこれに比べればいくらか改善されつつあるようには見える。過去20年にわたる輸出指向工業化によって、都市部工業は一定の労働アブソーバーの役割を担うまでに成長を遂げ、農村部からの析出労働力を吸引することにある程度まで成功してきた。チャオプラヤー・デルタでは依然として小作制が優勢とはいえ、一部の農民所得は上昇し、労働不足から水牛が姿を消しトラクターやコンバインが稼動する光景を、学生たちはバスの車窓から見る事が出来る。確かにタイにも社会的矛盾は多い。しかしこの国はこの数十年に着実かつ巨大な変容を遂げてきた。バングラデシュが学ぶべき数多くの「教訓」が、このASEANの中進国には確かにある。第三世界にも、急激な成長を要請されている「児童期」のような国もあれば、成長の中身を検討すべき「青年期」に差しかかった国もある…学生たちの疲れ具合にもよるが、そんなことが研修中の何回かの「夜間公開自主講座」では話題となる。昼間の「実地」が背景にあるだけに、彼らの眼差しは真剣であり、飲み込みも早い。心身上のハードさをあえて覚悟しても、一教育者としてこの研修に積極的に関りたいと願う理由の一つには、そうした有意義な時間を若い世代と共有できることが挙げられる。

遅しく暮らす人々のエネルギーに圧倒される2週間。「ここに住む数十億の人々と共に生きていくことこそが、私たちが未来に向かう唯一の道である」—明日が今日よりもきっと良くなることを願い、一日を精一杯に生きる彼らとの接触を通じて、アジア研修に参加した学生たちはこのような意識を獲得するまでに成長していくようにも見える。「異世界」への扉を開く行為とは、かくも刺激に満ち満ちている。

## 2. Joint Self-Help (共同的自助) — 「援助」と「自立」の錯綜

第三世界が直面する困難を解消する方策とは何だろうか、そして私たちは第三世界の人々が低開発状態から離脱するためにどのような形で手を差し伸べることができるのだろうかという問題は、貧困や低開発の問題に興味関心を抱く全ての人々にとって、きわめて重い課題である。そしてそれは多分、積極的にアジア研修の門を叩いた国際学部の参加学生にとっても熟考に値する知的テーマであると思われる。

第三世界諸国の相次ぐ独立を背景にして、第二次大戦後初期の開発経済学では、特に急速な工業化を達成するための重点的投資の必要性が力説された。大規模な傾斜投資無くしては、収穫逓減と人口増加がもたらすブラックホールのな低次均衡点—いわゆる古典派的定常均衡点—から発展途上諸国は脱出できず、飢えと貧困の中を半永久的にさ迷わなければならない。したがって、先進諸国からの援

助は工業インフラストラクチャー（産業社会資本）の整備を念頭に入れ、より大規模かつ集中的な投資をもって展開されるべきである。—ラ・ミントラによって唱えられた、いわゆる「ビッグ・プッシュ」の戦略は、かくのごとき認識に立ち一つの時代を築き上げた。この見解はケインジアン視点からも支持され、いわゆるハロッドの経済成長関数（ $G = \Delta k / C - r$ 、 $G$ …所得成長率、 $\Delta k$ …資本ストック増加分、 $C$ …資本係数（投入資本量／産出）、 $r$ …人口増加率）などは、経済成長を資本ストックの増加（あるいは貯蓄の大きさ）と資本の効率性、および人口増加率との相関としてモデル化したものだった。乱暴に言ってしまうと、経済発展を促すのは国内貯蓄を増加させ、投入資本の効率性を引き上げ、人口増加を抑え込むことに尽きる…というわけである。また、「ビッグ・プッシュ」による経済発展の果実は、当初は一部の産業資本家に限定されるが、持続的な経済成長によってその「恩恵」はやがて周辺に“こぼれ出し”、最終的には底辺部へと“染み込んで”いくであろう。「富めるチャンスのある者がまず富むことこそが、他の者にもチャンスを与える」—いわゆる「トリクル・ダウン（滴り落ち）」の論理がその後を追っかけ、「ビッグ・プッシュ」を補完する形で登場してきたのは、いわば必然的流れだったと言えるかもしれない。

しかし、この2つの理論はやがて厳しい現実の前に深刻な反省に立たされることになった。植民地遺制のもとで、第三世界農村部には搾取的構造が温存され、不平等な土地所有関係のもとで貧しい農民たちは補助労働力と老後保障の手段として多くの子供を望み、多産習慣を容易に放棄しようとはしなかった。結果、相対的過剰人口プールとしての農村部の地位は改善されず、多くの農民は生存賃金水準のもとで貯蓄＝資本蓄積の可能性をほとんど手に入れることが出来なかった。また都市の工業部門も、それが主に非効率な官僚機構が主導する国有企業主体の輸入代替工業化に傾斜した結果、資本集約的な大規模装置産業には雇用吸収力が決定的に欠けていた。都市住民の所得水準は上がらず、周辺部には農村から“押し出される”相対的余剰人口が堆積し、スラムがスプロール状に拡がっていった。そして、もともと狭隘だった国内市場向けの生産ゆえに、輸入代替工業は数年を経ずして「飽点」に達し、停滞した。保護と既得権、そして官僚的腐敗に囚われたその工業部門には国際競争力は無く、資本財の輸入がもたらす貿易赤字と補助金支出に伴う財政赤字によって、新興独立諸国の多くは深刻な外貨不足に直面することになった。さらに都市—農村の相剋関係は容易に解消されず、トリクル・ダウンが想定した国民経済全般の浮揚も、一部の例外を除いては実現しなかった。結局、投入資本の量的拡大を金科玉条とした開発戦略には、「何か」が決定的に欠けていたことが明らかとなったのである。

ありきたりな学説紹介は、このあたりで止めたほうが宜しかろう。言うまでもなく、一言で第三世界といっても、そこには多様な社会的、文化的、政治経済的差異がある。土地所有関係や地理的条件、流通機構の形態、商習慣、あるいは人々の価値観にいたるまで、それぞれの地域で様相は大きく異なっている。結果、社会経済開発の初期条件はそれぞれに違い、そこに生きる人々の基本的ニーズもまた多様であろう。要するに、ビッグ・プッシュとトリクル・ダウンの戦略には、現地で暮らす「人々の顔」が反映されていなかった。産業インフラ整備の重要性は認めるにしても、開発戦略には現地に見合った多様なモデルが構築され、相応の社会改革を伴って推進されるべきであり、したがって、先進諸国が考慮すべき援助もまた、現地の社会改革を後押しし、人々の基本的ニーズに対応したものでなければならない。また、その本来の目的も、単に苦境を一時的に救済する「施し」としてではなく、最底辺に暮らす人々の社会経済的な自立を促す総合的・長期的な支援として捉えるべきものなのである。

幸い、アジア研修ではそうしたことを実感させられる幾つかの現場に立ち会うことが出来る。一例

として、過去3回訪ねたグラミン銀行や他のNGOによってバングラデシュの農村部に展開されているマイクロクレジット・プログラムが挙げられる。担保もなく返済能力も無いとされ、金融へのアクセス手段を絶たれていた土地無し農民たちへ少額ながらも経済的自立を支援する資金を融通するという、今日では極めて有名となったこの支援プログラムを1976年に初めて考案したのは、当時チッタゴン大学で経済学の教鞭をとっていたムハメド・ユヌス博士である。社会的最底辺層とも言うべき土地無し農民たちはショミッティーと呼ばれる共同的自助と返済上の連帯責任組織を作り、ファイナンスされる資金を有効に活かし、養鶏、機織り、最近では携帯電話貸し出しなどのビジネスに乗りだし、確実に収入水準を上げている。危惧される資金返済率は見学したいずれの村でも90%を超える高率であり、「借金チャラ」をお願いして開き直るような、どこかの国のゼネコンなどのような厚顔さ、無様さは微塵もない。その代わり、マイクロクレジット・プログラムに加わる人々（多くは女性である）の横顔に垣間見えるのは、「自立」への自信と誇りである。インタビューした範囲では、マイクロ・クレジットの新規加入者向けの当初貸し付け金利は年利16~20%（その後の返済実績に応じて8.5~10%へと漸減する）と、貧困層を対象としたファイナンス事業にしては相当高い。こんなに高くても大丈夫か、と学生たちは首をかしげるが、相応の理由はある。貸し出し金利を高い水準におくことで、事業体は預金金利を比較的高くすることができる。マイクロ・クレジットを利用して稼ぎ出した収入の一部を貯蓄に誘導することを通じて、最終的には借入金ではなく自己資金で仕事を行なうことができる段階にまで引き上げ、貧困からの離脱を支援するという、「自立へのサイクル」形成に対する強い意志がそこには働いている。<sup>(注2)</sup>

あるいはタイ・カンチャナブリ郡の児童養護施設「子供の村」の事例。両親のいない、あるいは諸般の事情で親から離れて生活せざるを得ない子供たちが集うこの施設では、子供たち自身が制定したルールと週1回のミーティングによって施設全体の運営方針や内容が決定されていく。先生方は彼らの決定に口をはさむことはほとんど無く、ただ暖かい眼差しで子供の成長を見守っている。グラミン銀行にせよ「子供の村」にせよ、援助を単なる「お恵み」とは考えず、「自立への支援」こそが要諦なのだという哲学が現場には躍動していた。

「富める奴隷に留まるよりも、貧しくとも独立を選ぶ」と、ギニア独立の父セク・トゥーレがに高らかに宣言したのは1958年だった。しかし、第三世界はいつまでも「貧しくとも独立」というだけの地平には留まっていはいないだろう。第三世界のいたる所で共同的自助を通じた様々なトライアルがなされ、アントレプレナー（起業家精神）や自主独立の気概が生み出されている。萌胚の土壌は静かに、だが着実に拡がっていることを、私たちは学ぶことができるのである。

### 3. Empowerment（「力」を育む）—「希望」への新たな鍵

「人間の顔」により配慮を払った経済発展理論が形を成してきたのは1980年代以降だろうか。社会経済開発に果たす人間の能力の役割は決定的である。その国が持つ技術水準やその体系を活用できる国民教育のレベル、さらにはそれらを向上させるために果たす政府の役割等々…経済発展には資本ストックの増加や投入労働量との相関だけではなく、両者に帰属しない「その他諸々」の要素—総要素生産性（Total Factor Productivity=TFP）—が、実は重要な役割を果たしている。人的資本の質的向上とその蓄積がもたらす外部効果に注目し、経済発展のメカニズムを解明しようとする「内生的成長理論」がルーカスやローマーらによって唱えられたのは、ビッグ・プッシュ戦略の破綻とアジア NIES（新興工業経済群）など、一部途上国の経済的台頭とけっして無縁ではないだろう。<sup>(注3)</sup> 現代の

開発経済学は、優秀な技能労働力の再生産と比較優位を連続的に生み出していくための積極的な人的資源育成策を基礎とした輸出指向工業化戦略によって、急速な経済発展を遂げてきた NIES などの一連の成長メカニズム分析を通じて、「『人』こそが社会経済開発のアルファでありオメガである」との認識を獲得するに至った。

ところで、一人の人間が社会的・経済的に独り立ちできるよう、彼らが持つ可能性を最大限に引き出すための働きかけ—近年、開発援助 NGO や教育研究機関でよく使われる empowerment という概念は、人間が本来持っている自立能力と他者との共生を営む力を育むための支援努力全般を指している。言うまでもなく、empowerment の具体的項目は多岐にわたる。基礎的教育、技能訓練、ジェンダー、社会福祉等々…底辺層にいる人々への社会的諸資源の注入、彼らの社会的参画を支援する諸々の試みは、当然のことながら総合性の強いものであり、また息の長いものでなければならない。

アジア研修における「empowerment の現場」もまた多彩である。バングラデシュの農村で訪ねた村の“NGO 立小学校”は粗末な小屋の中にある。乏しい教育施設の下で、十数人の子供たちが石板の上にベンガル語や加減乗除の練習をしている。しかしこの子供たちには、どこかの国の子供たちにある特有の陰りは無い。ここでの勉強が自分たちの empowerment を育み、必ず明日をより善いものとしてくれるというシンプルかつ楽観的な確信が、学ぶことへの情熱をかきたてている。ここには、どこかの国のように大人たちに望んでもいない競争を強いられ、「学ぶこと」がますます自己疎外につながるような悲惨さは、少なくとも見られない。子供たちが口をそろえて言うように、ここでは確かに「勉強することが面白い」のである。ダッカでは職業訓練学校や小さな縫製工場を訪れる。技能を身に付けること、製品を造り出す能力を育むことはバングラデシュのような LDC にとって、とりわけ重要である。学生たちよりも更に若い男女が工作機械を操作したり、ミシンを動かす。何気ない光景…と考えるのは早計であろう。彼らは技能と訓練こそが社会参加を可能とする鍵であることを認識している。とりわけ第三世界の女性たちにとって、経済的自立と社会参加がもたらす意義は計り知れない。ここは、男性優位の社会を少しずつ変えていくダイナミズムの発信源でもある。また、輸出指向の工業化はまだ緒についたばかりだ。「停滞のアジア」からの脱出は、彼ら彼女らが稼ぎ出す外貨と経営資源の摂取と自身の資質向上なくしては有り得ない。象徴的に言ってしまうならば、稼動するミシンから生み出される国際競争力を備えた T シャツ（ちなみに、今日ではバングラデシュの輸出額の実に 4 分の 3 近くは繊維紡織部門から生み出されている）は、まさにこの国に明るい未来をもたらす最大の「切り札」である。

こうした現場を訪ねることは、国際学部学生のみならず、教育学部や人間科学部の学生たちにとっても有意義だろう。彼らもまた、第三世界の現場と自らが志向する将来の職場との比較を通じて、第三世界固有の問題を抽出するだけでなく、日本の教育制度や福祉に関する特有の諸問題に肉迫するうえで、より広い視野を獲得できるのである。「empowerment の現場」が提供してくれる教材は、やはり知的に面白い。

社会経済開発にとって最も重要な要素が「人」そのものに内在するというごく単純な原則は、いわゆる「箱もの」建設に重点を置いてきた、これまでの日本の ODA のあり方自体にも再検討を迫っている。援助の本質が第三世界の人々、それも最低限度の基本的ニーズさえ満たせない人々の社会経済的な自立を支援することにこそあるとするならば、関心は彼らの empowerment をいかに育むことができるか、という点にこそ集中されるべきであろう。日本の ODA 政策に関して、私たちの学部で南アジア地域研究と日本の対アジア外交を講じている山口博一教授は、そのあるべき指針を次のように簡潔に要約している。「もしそれ（保険衛生、環境、教育などを含む多面的な、社会の底辺に対する

援助)が、上からのお仕着せでなく社会の底辺層の自主性を尊重し、その参加とエンパワーメントを重視する仕方で行なわれるならば、より今日の時代にふさわしい方式となるであろう。」<sup>(註4)</sup>—敬愛する先達から発せられた短いエッセンスの中に、empowerment という概念が期せずして登場することは、極めて興味深いことではある。

#### 4. Endogenousization (内生性) — 「橋をわがものとする」ことの意味

プログラムのハードさの代わりにと言うべきか、アジア研修への参加を通じて、学生たちは多くのことを学んできたと思う。2週間の「異世界への旅」を通じて、彼らは知的に啓発され、そこに住む人々と自分たちの関係性に思いを馳せることが出来るよう、感性を磨き澄ます。密度の濃い現地滞在は異文化体験への小さな“ショック療法”ともなり、帰国後には彼らの多くが、これまでの自分たちの知識の乏しさや世界認識の甘さへの反省を口にする。

「自省は自己革新の母である」?…興味深いことに、彼らの多くが少しづつ“変わって”いく。ある学生は現地の社会事情への理解不足と、特に向こうの大学生との交歓会で十分なスピーチができなかった無念さからか英語の勉強に精を出し、2年後には米国派遣留学生となって発展途上国研究を課題に選んだ。ある学生は、現地 NGO の活動に触発され、海外でのボランティア活動により積極的に関わるようになった。ある学生は、国際関係をより身近かに捉えるようになり、平和学に関する会合などに参画するようになった。そして今日、参加学生の多くが各ゼミナールにおいて指導的役割を果たしている等々…過去4回の引率を経て、私の胸中には一つの手応え、あるいは確信が育ちつつある。この研修が、参加する全ての学生になにがしかの自己変革へのモーメントを付与しているという小さな、しかし確かな手応え…

一つだけ事例を。タイ・カンチャナブリにあるメクロン川架橋、「戦場に架ける橋」で有名なこの鉄橋を往復し、近くの戦争博物館を訪れる。かつて戦争という極限状況のもとで、人道を無視した強制労働が行なわれた。多くの犠牲者が遺品とパネルを通じて紹介される。ここに立つ時、私たちは否応なく戦争の悲惨さと平和の尊さに思いを馳せる。そして若者たちは、同じ年頃だった犠牲者の青春と自分のそれとを重ね合わせ、何事かを考えさせられるのだろう。アジア研修が国際学部の学生に提起するものの一つは、そうした「過去」と「現在」、「世界」と「自分」との関係性に対する課題である。なるほど、学部教育の総体からすれば、研修プログラムそのものが占める部分は微々たるものであり、2週間の研修自体はささやかな営みに過ぎないのかもしれない。しかし、それが各個人に投げかけている問題は、質的にも量的にも深遠である。

「変革へのモーメント」に促され進む参加学生の“変身ぶり”は、それ自体が彼らの自立への過程として教育的に意義深い。たどたどしい足取りとはいえ、一人一人が自分たちの頭で考え、自らの足で立つべく成長していく彼らの「その後」は、現地で接した人々の empowerment 努力それ自体を自らに取り込んでいく過程=内生性のプロセスとして注目に値する。

半世紀前、アルジェリア独立運動の精神的・理論的指導者フランツ・ファノン<sup>1)</sup>は、第三世界民衆が自立するために必要な「力」の内生性努力を、かの有名かつ高邁な例え話をもって語っている。

「一つの橋の建設がもしそこに働く人々の意識を豊かにしないものならば、橋は建設されぬがよい、市民は従前どおり、泳ぐか渡し船に乗るかして、川を渡っていればよい。橋は、空から降って湧くものであってはならない、社会の全景にデウス・エクス・マキーナによって押しつけられるものであ

てはならない。そうではなくて、市民の筋肉と頭脳から生まれるべきものだ。…市民はその橋をわがものにせねばならない。このとき、はじめていっさいが可能となるのである。」<sup>(註5)</sup>

学生諸君もまた、この研修が提供するか細い「道」を歩むことから、「橋をわがものとする」ために旅立とうとしている。声を大にして叫びたい。グッド・ラック！

## 5. Impressions (雑感) —結びに代えて

締め括りとして、雑感を少々。

あらためて言うまでもなく、過去6回のアジア研修は多くの人々の有形無形の努力と厚意に支えられてきた。藤田前教授、大学国際交流委員会、本部国際交流課・両キャンパス国際交流室職員の方々、ベテラン添乗員の村上精紀さん、日通旅行社の皆さん、採算を度外視して多大な労苦を厭うことがなかったベンガル・ツアー会社の友人達、訪問先の皆さん、そして心から優しくかったバングラデシュ、タイで出会った無数の人々…そうした人々の親切に甘えることによって、この研修には毎回みずみずしい「命」が吹き込まれてきた。

とりわけ国際学部の一教員として、私はこの研修を発議し、これまで全てのプログラムを統括し、実施にともなうあらゆる困難を開き、「発展途上国への学生引率」という仕事のハードさを躊躇することなく引き受けてきた、藤田雅子という愛すべき個性に心からの感謝を捧げたい。地脈・人脈の見地からしても、この研修は同氏がこれまで耕してきた土壌の上に初めて実施可能だった。極言すれば、私たちは「藤田ワールドへの旅」に誘わなわれてきた、と言えなくもない。「学識に富んだ良き先生」は、また「良き母親」でもあった。同氏の参加学生すべての心身の健康に対する細心の気配りや、厳しさと優しさ、そしてユーモアを兼ね備えたかいがいしい指導ぶりには、同じ大学教員として教えられるところが多かった。

五学部と短期大学部学生を網羅する唯一の全学プログラムは、参加学生たちに湘南・越谷両キャンパス間の「異文化交流」という貴重な機会も提供してくれた。同じ現場を訪ねるにしても、専攻や学風の違いからか、両キャンパスの学生が抱く印象は様々である。異なる学問的背景を持った彼らが研修という濃密な時空間を共有し、異なる問題意識とアプローチを提供しあうことで、学生たちは問題の総体をより豊かに捉えることができたように思われる。そして、両キャンパス学生が一体となった一連の学習活動を通じて、この研修には多様性と学際性が備わり、知的により面白いものへと発展を遂げてきた。

さらに私自身のことも少しだけ。私にとってのアジア研修は、「研究室」と「現場」をシャトルする旅でもあった。「現場」を忘れての理論は机上の空論に他ならず、また「現場」の事実のみに拘泥すれば、そこに潜む「真実」を見失いやすい。「真実」の探究は、その背景となる社会経済的構造や国際的関係を冷静に分析、研究すること無しには進まない。少なくとも自身にあっては、理論と現実を「研究室」と「現場」をシャトルすることで、より実りあるものへと融合され、止揚されてきたように思われる。また、研修期間中に主催した「夜間公開自主講座」では、「昼間の現場」をふまえた学生との実践的対話の面白さを痛感した。偉そうな言い方になってしまうが、キャンパス内に留まっていたのは絶対に経験できない学生との濃密な接触・対話が自分を覚醒させる、実にエキサイティングな瞬間がそこにはあった。その意味において、アジア研修は自分自身の empowerment につながる存在でもあったのである。

\*

印象的な光景がある。「川の国」バングラデシュを、チャーターした船に乗り、沿岸の村や施設を訪ねつつ浮遊する。時折姿を現わすガンジス・カワイルカの“歓迎”を受けながら、水上の旅もそろそろ終わりに近づく頃、西の地平に傾く太陽から、名残りを惜しむかのように光線が差し込んでくる。川岸まで耕作された水田には、確実に実りを含んだボロ種（乾季米）が頭を垂れかけている。夕陽が地を覆い、穂先を照らすまさにその瞬間、大地は突然として一面の黄金色に染まる。タゴールが詩った「黄金のベンガル」が可視化されるそのほんの一瞬の前には、もはやありとあらゆる言葉が無意味となる。ガラにもなく、「俗事に翻弄され、日常に埋もれてもがいている今の自分は、果たして本当の意味で豊かな存在なのだろうか」などという哲学的命題さえ頭をよぎる満ち足りた時空間…この一瞬を体感し、自分自身を再発見するために、私たちはこの旅を続けてきたのかもしれない。

「思い出とは『事実』としてではなく、『詩』として記憶されるものなのであろう」—司馬遼太郎の長編小説『花神』の中にある、この一節を私は結構気に入っている。あいにく、私は学生たちに与うべき「詩」を何ひとつも持ち合わせてはいない。しかしその代わり、黄金色に染まったこのベンガルの大地は、鮮やかな一大叙事詩として、私たちが未来を託すべき若い世代に何事かを残してくれる。彼らをここに連れてくることの意味—アジア研修の意義—とは、つまるところ、参加者それぞれが心の中に素晴らしい「詩」を持つことに尽きるのかもしれない。

夕陽に染まる学生達の顔つきは少しばかり優しげで、ちょっぴり遅く変わっている。ダッカ空港でビビッていた彼らが、かくも短期間に成長を遂げていることに驚かざるをえない。一方、疲れ気味で、ただ日焼けしただけのオジサン（ちなみに、私のこと）はといえば、不精髭がはえた頬をなでながら、ブツブツつぶやくのである。「でらえりゃー（名古屋弁で「大変に疲れました」の意）けど、このちょっぴり幸福で、堂々たる感動の一瞬のために、また次も来るか…」

(了)

(追記) 本報告の執筆に際しては、資料照会などを含め湘南キャンパス国際交流室の仮屋紀衣子さんのお手を煩わせた。紙面を借りて心より感謝を申し上げたい。

## 注：

1. 藤田雅子氏のアジア研修企画に関する文献として以下の論文参照。「学問と生活の体験をプログラム化する—バングラデシュとタイの海外研修の構築」・文教大学生生活科学研究所『生活科学研究』第19集（1997年3月）、「若者行動と国際交流—バングラデシュとタイの海外研修を通して」・文教大学生生活科学研究所『生活科学研究』第20集（1998年3月）、「開発の主人公は、バングラデシュ」・文教大学生生活科学研究所『生活科学研究』第22集（2000年3月）他。また、氏の専門である国際比較福祉の立場から書かれた本として『国際福祉論—スウェーデンの福祉とバングラデシュの開発を結ぶ』（学文社・2000年）がある。さらに、参加学生たちが書いた「事後レポート集」（実施各年版）も読み応えがある。
2. マイクロクレジットと預金誘導との関係については、以下の文献が参考になる。Wright A N G., *Microfinance Systems*, the University Press Ltd., 2000
3. 専門的にはなるが、内生的成長理論に関する代表的文献として以下論文参照。Lucas, R., “On the Mechanics of Economic Development,” *Journal of Monetary Economics*, July 1988, pp3-42 &

Romer, P., "Increasing Returns and Long-run Growth," *Journal of Political Economy*, Oct., 1986, pp1002-1037

4. 山口博一「地域研究と国際協力のあり方」、東北大学北東アジア研究シリーズ第1号（2001年）、30ページ。
5. フランツ・ファノン『地に呪われた者：フランツ・ファノン著作集3』みすず書房、1969年、113～114ページ。